

一般的な学習過程

複式学級の学習指導においては、学習指導を効果的に行う学習過程として、一般的に次のような4段階があります。授業者は、2つの学年の学習過程をうまく組み合わせるとともに、指導形態を工夫する必要があります。

学習過程	主な指導形態	学習活動
課題把握	◇直接指導	学習課題が分かり、解決への見通しをもつ。
自力解決 ・学び合い	◇間接指導 ◇間接指導 →直接指導	予想・仮説に基づき方法を考え、解決に向かう。
まとめ	◇直接指導	学習成果を発表しながら、討議・修正・まとめをする。
適用・発展 振り返り	◇間接指導	発展的な課題の解決に努めたり、適用場面を考えたりする。 また、今日の授業で何を学んだのかを振り返る。

学習過程のパターンは、他にもあります。



直接指導と間接指導

直接指導の様子



直接指導とは、授業者が児童に対して直接学習内容を指導する時間です。

間接指導の様子



間接指導は、機械的な練習の場でなく、児童一人一人が自ら学び、考える力を育む時間です。

直接指導では…

間接指導において、児童が自主的な学習を進めることができるよう、学習意欲を高めるために問題提示を工夫したり、学習の手順を明確につかませたりすることが大切です。

そのためには、指導内容を精選して学習の手順や方法などを決定する時間を設定するなど、効率的な指導を行う必要があります。

また、学習したことを確認したり、賞賛したりするなど、自主学習への意欲をもたせることも大切です。

同内容指導の場合は、学年差、個人差に配慮しながら、同一の流れで学習指導を行います。学年別指導の場合は、直接指導と間接指導の場面が生じます。そのため両学年の学習を成立させるために、上学年と下学年の間に「わたり」や「ずらし」という工夫が必要となります。

間接指導では…

基礎的な学習方法の定着を図り、個人思考を深めたり、集団活動を充実させたりすることによって、自ら学ぶ力を育成していくことが大切です。

間接指導は、次の直接指導につながる準備の時間でもあります。直接指導の谷間にあたる時間（練習や自習の時間）として使うのではなく、自主的な学び方を養う絶好の機会としてとらえましょう。

また、他学年の学習に気をとられないような集中力と持続力を育てることも大切です。

間接指導につなげる直接指導

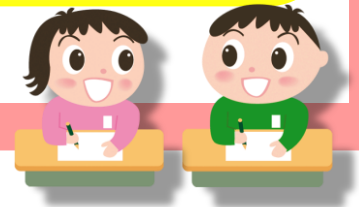
間接指導の場面で児童が主体的な学習を進めるためには、直接指導の時に、教師が次の活動を予測し、その活動に応じた指導をしておくことが大切です。

児童一人一人に活動をさせる準備

- * 発展的な問題、補充的な問題
- * ヒントカード
- * コンピュータ等の機器
- * 図鑑などの関係図書
- * 教材、教具
- * 小黒板、発表ボード

個々の児童に応じた指導

- * 終わったらどうするか
- * 困ったらどうするか
- * 教室以外で活動してよいか
- * 何にまとめるか
- * 一人で考えるのか、共同で考えるのか



間接指導における自主的・主体的な学習

児童が自主的・主体的な学習が進められるように、基礎・基本の確実な定着を図り、自ら考える力など「生きる力」を育むため、児童一人一人に応じた指導を充実させることが大切です。

【活動内容】

- * 興味・関心や理解の状況に応じた活動を設定する。

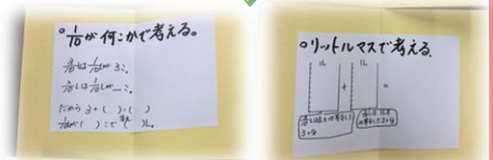
【個に応じた手立て】

- * 学習が進んでいない児童には、ヒントカードなどを準備する。
- * 学習が十分進んでいる児童には、チャレンジカードなどを準備する。

【環境整備の工夫】

- * 多様な追究ができるように、追究に必要な環境を整備する。
- * 多様な表現ができるように、表現に必要な環境を整備する。
(小黒板、画用紙、模造紙、付箋紙、マジックなど)

ヒントカードの例



「ずらし」と「わたり」

「ずらし」とは・・・

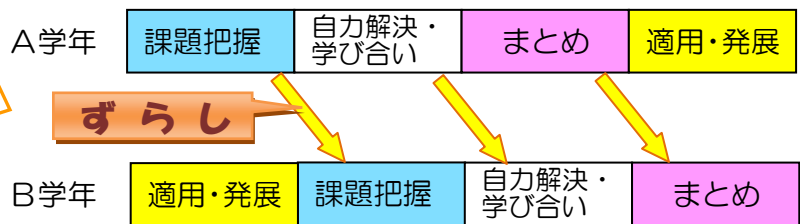
学年別指導を行う場合、一人の教師が2つの学年を同時に指導します。このとき、両学年とも「課題把握」に教師がきちんとかかわる必要がある時間などにおいては、両学年とも同時に「課題把握→自力解決・学び合い→まとめ→適用・発展」の過程で指導に当たると、教師がかかわれない学年は、教師が来るまで“待ち”の時間が生じることになります。

そこで、下図のように、直接指導の時間が重ならないよう指導過程を学年別にずらして組み合わせ、それぞれの学習過程における指導を充実させる工夫があります。

このずらした組み合わせを「ずらし」といいます。「ずらし」は、それぞれの学習活動を無理なく、効率的に行うようにするための工夫の一つです。「ずらし」には、1単位時間における「ずらし」、単元全体の「ずらし」があります。

【1単位時間における「ずらし」の例】

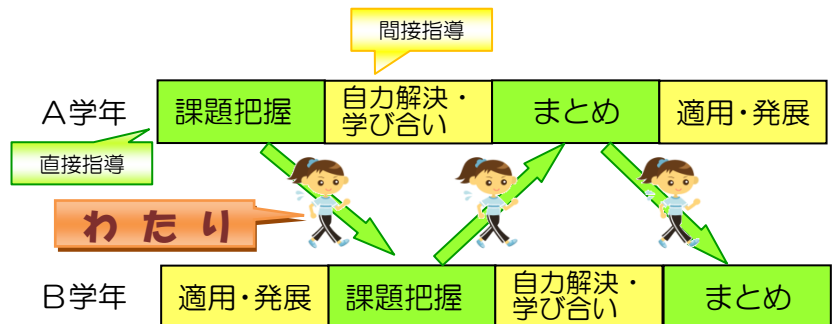
この「ずらし」の例では、1単位時間の中で、A学年が直接指導で課題を把握している間に、B学年は間接指導で前時の適用問題を解き、その後、直接指導でこの時間の課題を把握するという流れとなっています。



「わたり」とは・・・

指導過程をずらすと、A学年の「課題把握」の指導に当たっていた教師は、その後、B学年の「課題把握」の指導に当たることになり、A学年からB学年へ移動します。その間、A学年は課題の自力解決を図るなど、児童だけで学習を進める時間（「自力解決・学び合い」）となります。そして、B学年の課題把握が終わった教師は、再びA学年の「まとめ」の指導に当たります。

このように、教師が該当学年の指導を行うために、学年間を移動することを「わたり」といいます。



「わたり」のタイミングのポイント

「わたり」の目的

- * 教師が直接にかかわり、指導をするため。
- * 教師が児童の様子を直接捉え、評価をするため。
- * 児童が自力解決できる場面であり、直接指導を必要としないため。

何のために「わたる」のか、その目的を教師がしっかりと捉えておくことが大切です。



「わたり」のタイミングのポイント

間接指導から直接指導への「わたり」

- * 自力解決した内容を修正するとき。
- * 自力解決した内容を焦点化するとき。
- * 自力解決した内容以外の考えに出合わせるとき。
- * 自力解決した内容を深化・発展させるとき。
- * 自力解決の行き詰まりやつまずきへの支援を行うとき。



直接指導から間接指導への「わたり」

- * 課題に対して自力で解決できる力や手立てがあるとき。
- * 解決の見通しをもっているとき。

何を（内容）	何のため（目的）	どのように（方法）
どのくらい（程度）	いつまで（期限）	

- * つまずいたときの手立てをもっているとき。

- ・ ヒントカードが準備されている。
- ・ 学習を振り返られるノートや掲示物等が整理されている。
- ・ ガイドや友達に相談できる体制になっている。
- ・ その他につまずいたときの約束が事前に指導されている。

「わたり」を効果的に行うために、直接指導と間接指導の間に、同時間接指導を取り入れ、両学年の学習状況を同時に見取り、一人一人の学習状況に応じた指導をする時間帯を設定することもあります。

例えば、次のような場合は、取り入れることがあります。

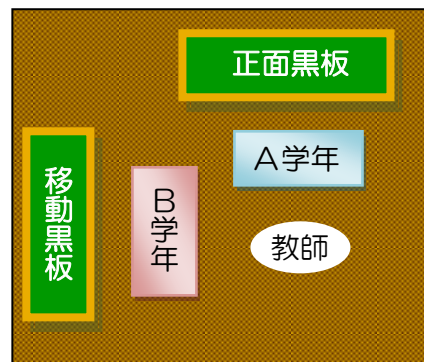
- ◆ 上学年と下学年がかかわりながら、調べたり発表したりする場合。
- ◆ 児童一人一人の学習状況を適切に判断し、次の学習の場の指導に生かす場合。

学習形態の工夫

複式学級において学年別指導を行う場合には、机の配置と黒板の位置を工夫して、2つの学年の学習がスムーズに進められるようにする必要があります。

A学年前向き・B学年横向き

A学年が前を向いて正面にある黒板を使い、B学年が横を向いて、ホワイトボードや移動黒板等を使って学習する形態です。この形態は、それぞれの学年の児童の顔が見やすく、教師の動きもスムーズです。



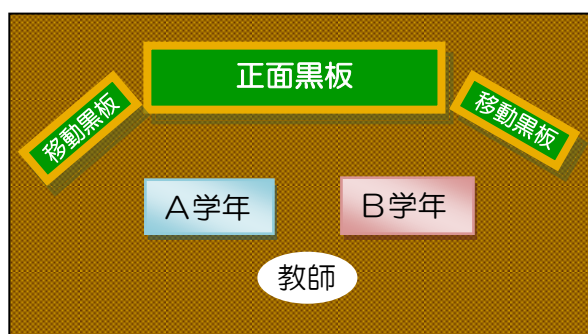
A学年前向き・B学年後ろ向き (互いに背を向けて学習する形態)

A学年が前を向いて正面にある黒板を使い、B学年が後ろを向いて、ホワイトボードや移動黒板等を使って学習する形態です。この形態は、それぞれの学年の様子が見えにくいので、隣で学習していることが気にならない配置です。ただし、教師は児童の顔が見えづらくなります。



A学年・B学年ともに前向き

A学年とB学年が、ともに前を向いて、正面にある黒板を使って学習をする形態です。この形態は、間接指導にある学年の様子を把握しやすいことから、自力解決やとも学びで困っているときに、速やかに対応できます。また、児童のよさを見つけて褒めるなど、教師による価値付けをすることもできます。



【A学年前向き・B学年横向きの例】



【移動黒板の例】

